

## 島原城下絵図翻刻稿（6） 「肥前島原之城図」

西田，博

<https://hdl.handle.net/2324/4486296>

---

出版情報：pp.1-22, 2019-09-21  
バージョン：  
権利関係：

島原城下絵図翻刻稿⑥

# 「肥前島原之城図」

## 目 次

1. 基本データ .....	2
2. 翻刻 .....	3
3. 語註 .....	8
4. 解説 .....	14
5. 禅林院について .....	17
6. 参考史料・文献・WEBサイト .....	20
7. あとがき .....	22

2019年9月21日

西田 博

## 1. 基本データ

---

所蔵機関：長崎歴史文化博物館（長崎県長崎市立山1丁目1番1号）

史料番号：3 162-1(オリジナル番号)

史料名：肥前島原之城図 延宝3年霜月27日。

内題：肥前島原之城図。

外題：不明。

景観年代：寛文4年～9年（推定）。

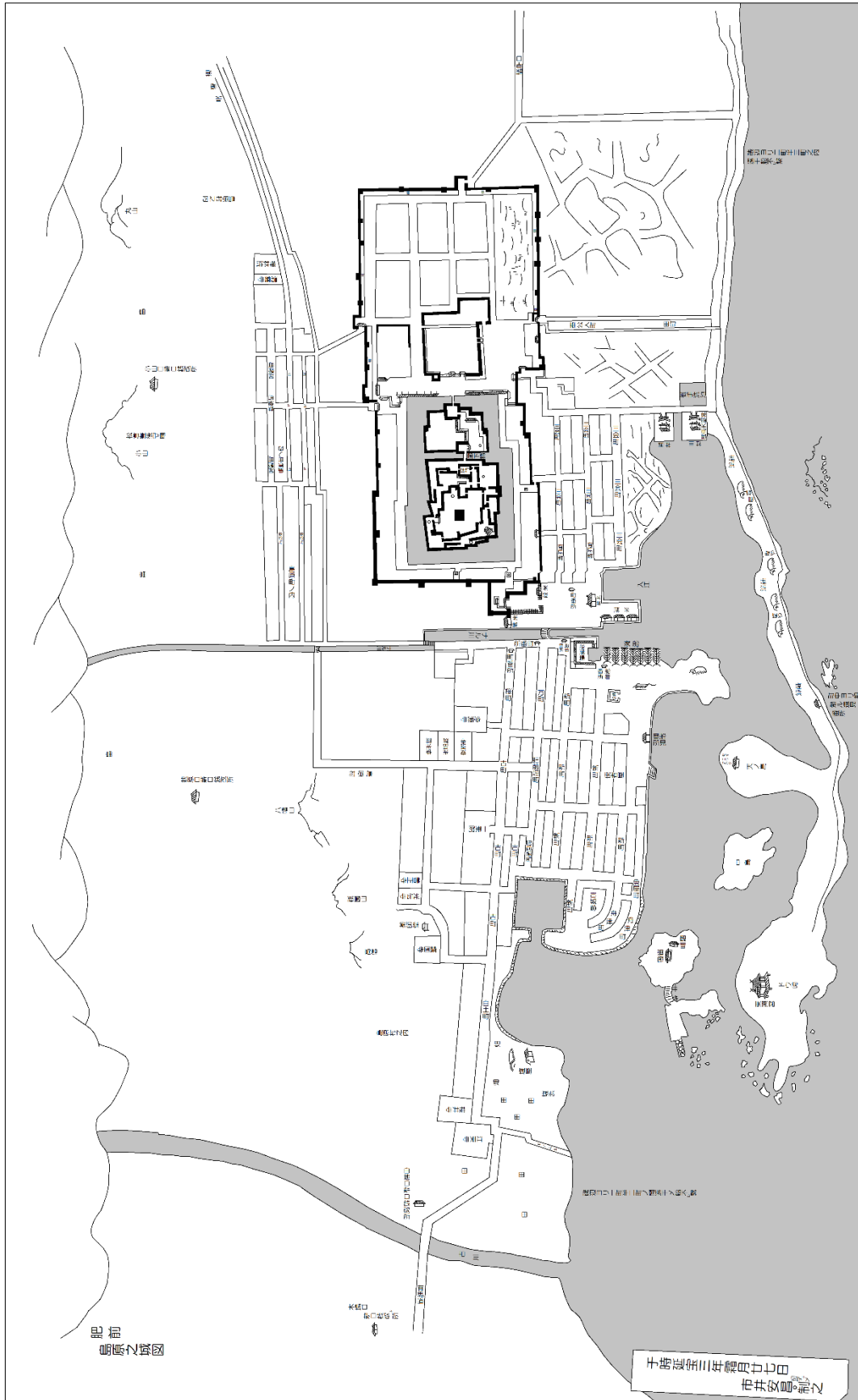
作成者：市井安昌。

作成年：延宝3(1675)年。

形態：一枚物。

法量：140×84cm(近世絵図地図資料研究会 2003, 解題目録 30 頁)。

## 2. 翻刻 ※次頁以下に部分拡大図を掲載













### 3. 語註

---

#### 【あ】

- 足 軽 町 …鉄砲町（鉄砲足軽が居住した町）が別にあることから、鉄砲足軽以外の軽輩の武士が居住した町と考えられる。
- 天 ノ 島 …あまのしま。島原の湾内にかつて存在した島嶼の一つ。烏山を擁する。島原大変により陸地の一部となった。島の輪郭は「島原郡村図 島原町」によってうかがうことができる。また、烏山の名残と思われる丘が、旧字図「第百二拾三号 烏山南」や「御城下量地三分拾間之図」から窺える。なお読みは、島高同窓会(2019)による。現在、弁天町2丁目（字「烏山南」）。⇒[図6-18](#)
- 小 山 …島原農業高校と島原工業高校の間の独立丘陵。現在、島原市小山町（字「小山」）。なお小山町は現在、「こやままち」と読むが、「扶桑城図記 二」には「御山」とあり、近世における読みは「おやま」と考えられる。⇒[図6-28](#) ⇒松倉豊後守。

#### 【か】

- 祇 園 山 …光伝寺（島原市寺町）本堂裏の丘陵。入口付近に「祇園山」と記した石柱がある。現在、島原市寺町（字「寺町」）。 ⇒[図6-22](#)
- 五 社 …寛永7(1630)年以前の創立。大神宮・八幡宮・天満宮・春日大明神および、不明の一社を祀る（西田2018b）。 ⇒[図6-16](#)
- 古 城 跡 …浜城（はまのじょう）跡。浜城については（西田(2017a)を参照。 ⇒[図6-20](#)
- 小 山 …⇒小山（おやま）。

#### 【さ】

- 塩 浜 …塩田。
- 塩 屋 …濃縮した海水をさらに煮て、塩を作るための小屋。釜屋ともいう。松平忠刻は城下巡見の折、塩屋に立ち寄り、塩釜を見学したという（入江1972, 279頁）。
- 使 者 屋 …「客屋」（「肥前国嶋原城図」「島原城廻之絵図」）、「御使者屋舗」（「森岳城図」）とも。幕府の役人や他藩からの使者が島原を訪れた際、その使者あるいは随行員が宿泊・休息するための施設。藩側から重臣や役人が出向いて饗応にあたった（島原市教育委員会2008, 17, 202, 235頁；同2010, 5頁；同2011, 98, 187頁）。比定地については西田(2017a)を参照。 ⇒[図6-19](#)
- 霜 月 …11月の異称。

新 町 …城下町の草創期以降に町立てされた町。

清 雲 寺 …晴雲寺。「清雲寺」は比較的初期の文書・絵図に見られる用字である。 ⇒図6-⑳

セイロウヤカタ…深溝松平氏の福知山旧領付近には、「井籠（蒸籠）倉」と呼ばれる伝統的な作りの倉庫建築が見られるが、これを指すか。「せいろ屋形」は製塩した塩を納める蔵（塩蔵・塩倉）とも考えられる。なお、「せいろ」は、「セイロウ」「せいろ」、「井楼」、「勢楼」とも表記され、「屋形」は「ヤカタ」とも表記される。また「屋形」のほか、「小屋」の語が用いられることもある。

善 正 寺 …比較的初期の文書・絵図に見られる寺院名である。立地は、近世中後期の光伝寺・善法寺付近に相当する。

禅 林 院 …高力家菩提寺。本稿「5. 禅林院について」を参照。 ⇒図6-㉑

### 【 た 】

高 信 …龍造寺山城守隆信（1529～1584）の墓所。護国寺（島原市寺町）本堂裏の独立丘陵に現在も残る。なお、この丘陵を「隆信山」という（「島原大変前後図」）。現在、島原市寺町（字「上ノ原」）。 ⇒図6-㉒

鷹島大明神…現在の猛島神社（島原市宮の町）。 ⇒図6-㉓

薪口銭改所…島原藩では口銭に関する定めがあり、例えば薪などを他所より買入れ、他所へ売出した場合、代銀100匁につき4匁ずつ取り立て、半分を藩へ半分を問屋へ上納していた（高木2006, 52頁）。なお、薪口銭は山銭とも称していたようである（島原市教育委員会2008, 38頁）。

鉄 砲 町 …鉄砲足軽が居住した町。

東 照 宮 …徳川家康を祀った社。現在の霊丘神社。絵図作成当時（延宝3年ごろ）の正確な立地は不明だが、字「権現山」（ほぼ、現在の霊丘公園に相当）にある高台の一つと考えられる。西田(2018b)を参照。現在、島原市弁天町2丁目。

ド ウ 崎 …どうのさき。「島原城廻之絵図」に「どうの崎」、「肥前島原之城図」に「ドウ崎」とある。恐らく東照宮（東照権現様御宮）に由来する「堂（ノ）崎」なのであろう。

遠見番所 …異国船を警戒するための番所。明細帳に「長浜番人」という役職が見えるが、この遠見番所に詰めた見張りの役人なのであろう。比定地については島原市教育委員会(1981)に詳しい。それによると、陸繋砂州上の丘（金戸山あるいは金蔵山）に遠見番所は置かれていたという。遺構の大半は1991年、大手川改修工事の際に破壊され（〔島原市〕2002, 193頁）、現在は湾口付近の潟地となっている。 ⇒図6-㉔

于 時 …ときに。

## 【 な 】

- 中 島 …中之島。島原の湾内にかつて存在した島嶼の一つ。久兵衛（きゅうびょうえ）山を擁する。島原大変により陸地の一部となった。
- ナル川 …「神川」の意、との指摘がある（吾妻町 1983, 263 頁）。現在の「大手川」。⇒図 6 - ㉔
- ニ ノ …にして。「ノ」は合字で、「して」あるいは「にして」と読む。

## 【 は 】

- 八 幡 山 …読みは「はちまんやま」などが考えられるが、不明。善法寺（島原市寺町）本堂裏の丘陵。現在、島原市寺町（字「馬場」）。 ⇒図 6 - ㉓
- 肥前掘町 …肥前堀町。慶長 19（1614）年に有馬氏が日向へ転封となったのち、北目は大村藩が、南目は佐賀藩が預かることとなり、日野江城および原城は内田舎人・鍋島七左衛門・多久長門が、島原村浜城には綾部左京と中野甚右衛門が定番として入った。その後、浜城防禦のために堀を掘り、土手を築いたが、その際、堀を肥前堀と名付けている（国書刊行会 1970, 591 頁）。これに由来する町名なのであろう。
- 船 不 繫 …ふねかからず。船不懸とも。「船懸り（ふながかり）が悪く、船の停泊には適していない。」の意。
- 船 家 …船入（「肥前国島原津波之絵図」）・御舟屋（「島原大変前後図」）・御船倉（「島原藩土屋敷図」）とも。屋根を設けた船倉。一艘分ごとに石垣で囲った。⇒図 5

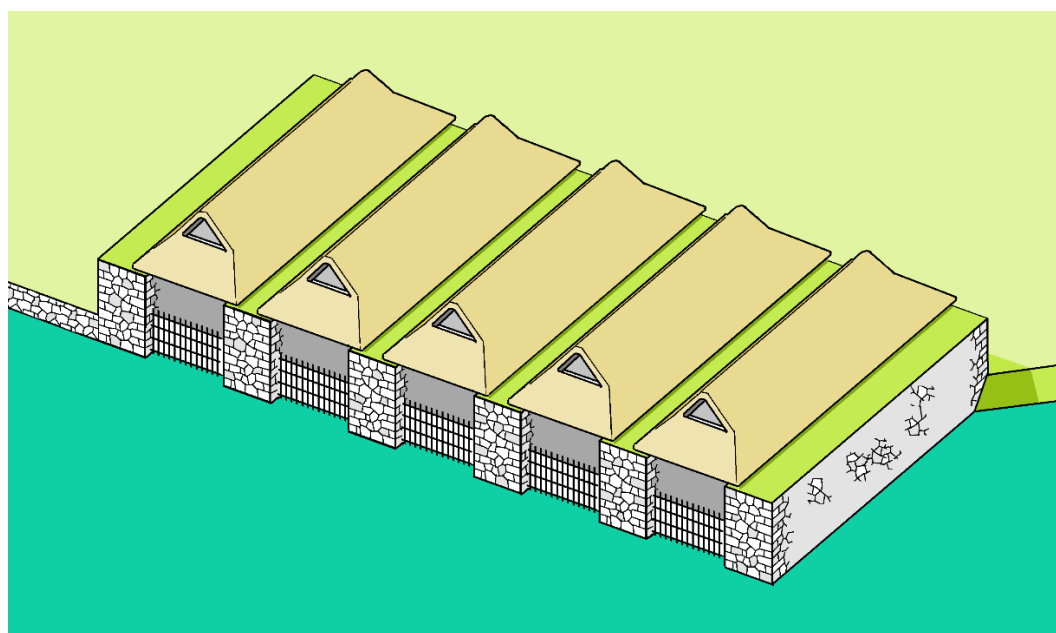


図 5 船家推定復元図

## 【ま】

奉公人町 …奉公人町のあった田町については、寛文 12(1672)年の絵図に「侍」、またその系統図に「給人」とある(島原市教育委員会 2016, 66 頁・136 頁)。また田町には近世中期頃、重臣である松平・板倉両家の陪臣が居住していた(「島原大變前後図」、林 1954c, 518 頁)。奉公人は陪臣を指す語なのかも知れない。

松倉豊後守…日野江藩・島原藩藩主松倉豊後守重政(1574?~1630)。島原城下の西に松倉重政の廟がおかれたことは多くの絵図から知られるが、本図によってその場所が「小山」であったことが判明する。山中には多くの石垣遺構が残るが、廟所というよりむしろ畑地の名残りという印象を受けた。なお現在、山の西側に(島原カトリック教会 小山墓地)や、伊藤栄治・永運の墓所がある。⇒小山(おやま)。

丸 山 …現在の本光寺本堂の裏手にある独立丘陵。戦国期の丸尾城跡とされる。現在、島原市本光寺町(字「本光寺」)。⇒図 6-②⑦

御手洗 …みたらい。みたらし。御手洗池(「肥前島原之城図」)。御手洗とは、神社の近くにあつて参拝者が手を清め、口をすすぐ所の意。この場所はもと陸繋砂州と本土に挟まれた湾の一部であったが、その後、土橋(「肥前国島原城図」)の構築によって池となり、さらに湧き水が流入していたため水は真水へと転化したと考えられる(西田 2018b)。⇒図 6-⑭

## 【や】

薬師堂 …薬師如来を安置した堂。立地は現在の叶寺。

## 【ら】

籠 や …籠屋。牢屋。⇒図 6-④付近

## 【わ】

エケノ川 …「ゑけ」または「ゑげ」は地名(鶴田 1994, 53, 69, 70 頁)。会下(寺)が語源か(根井 2017, 14 頁)。

## 【 その他 】

- メ …にして。「メ」は合字で、「にして」あるいは「して」と読む。⇒ニメ
- …狭いスペースに文字を挿入する場合、その箇所に小さな「○」印を入れ、その右に挿入する字句を書く。これを「補入」(ホニユウ)という。絵図本紙表の箋に記された文言は、「市井安昌、初学にして之を制す」となろう。

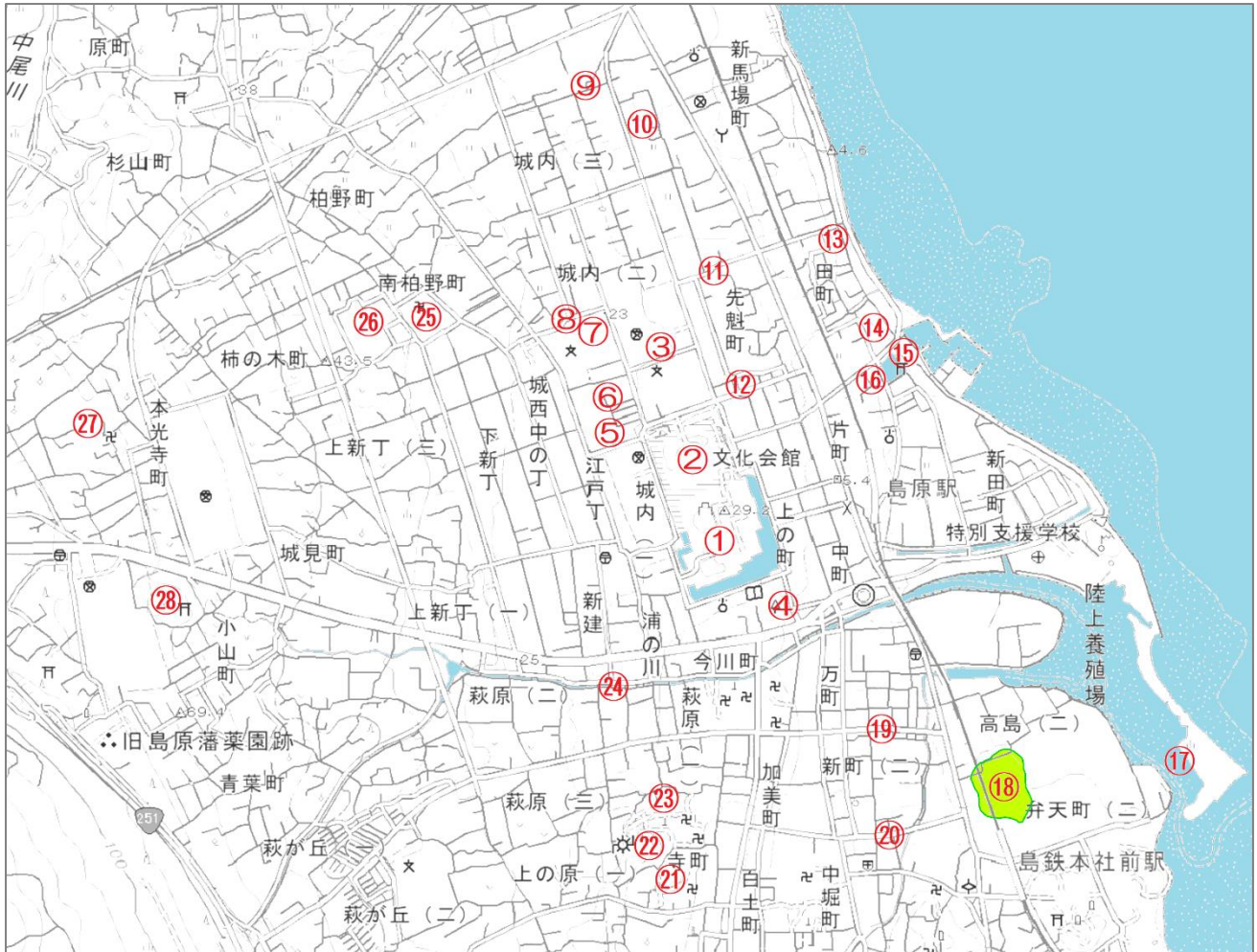


図6 施設名等位置比定図

※国土地理院の電子地形図に丸数字および、「島原郡村図 島原町」による「天の島」の輪郭線等を加筆。

- |              |              |
|--------------|--------------|
| ①島原城本丸       | ⑮鷹島大明神       |
| ②島原城二ノ丸      | ⑯五社          |
| ③島原城三ノ丸      | ⑰遠見番所        |
| ④島原城追手       | ⑱天ノ島（烏山）     |
| ⑤御城米蔵        | ⑲使者屋推定地      |
| ⑥勘定所・寄合場・鷹部屋 | ⑳古城跡（浜ノ城）推定地 |
| ⑦樹木畑         | ㉑高信（山）       |
| ⑧桜門          | ㉒祇園山         |
| ⑨諫早口門        | ㉓八幡山         |
| ⑩田屋敷         | ㉔ナル川（現在の大手川） |
| ⑪田町口門        | ㉕清（晴）雲寺      |
| ⑫先掛門         | ㉖禪林院         |
| ⑬往来番所        | ⑳丸山          |
| ⑭御手洗池        | ㉗小山          |

## 4. 解説

---

### (1) 景観年代

下記①～⑥の理由から、「肥前島原之城図」の景観年代は寛文 4(1664)年から寛文 9(1669)年の間と考えられる。ただし加筆と考えられる箇所もある(後述)。

- ① 先掛門は寛文 13(1673)年の改修以前の様子を描く(島原市教育委員会 2008, 189 頁)。
- ② 絵図に「鷹島大明神」が見えるが、現存する藩日記を見る限り、「鷹島」という用字は延宝 3(1675)年以前にのみ見られるものであり、それ以後は「太嘉島」あるいは「猛島」と表記される(西田 2018b)。
- ③ 「鷹島大明神」(上記)は、延宝 3(1675)年に社殿の向きが変更される以前の様子を描く(西田 2018b, 15 頁)。
- ④ 明暦元(1655)年に死去した高力忠房(禪林院殿傑岑道英大居士)の菩提を弔うために創建されたと考えられる禪林院(山号・寺号不明)が図示される。
- ⑤ 禪林院が図示され(上記)、寛文 9(1669)年の島原本光寺創立以前の絵図であることを示す。 ※「5. 禪林院について」を参照
- ⑥ 絵図に見える「東照宮」は、寛文 4(1664)年、別の場所からこの地へ移されたという(西田 2018b, 15 頁)。 ※ただし、異説あり。

### (2) 景観年代以降の加筆

絵図には三ノ丸御門(表御門)が2カ所描かれ、そのうち1カ所には×印を付すが(図7)、これは寛文 13(1673)年に行われた三ノ丸御門の建て直し工事の様子を表している可能性がある。「島原藩日記」寛文 13 年 1 月 11 日条に、「三ノ丸御門を建て直すにあたり、現在まで使用してきた門を取り払い、新たに仮門を建てた」との記事があり【註1】、また寛文 13 年 1 月 22 日条には「今日は巳の日の吉日なので、棟上を行い、御台所より酒肴を出した」とある【註2】。

---

【註1】 一、三ノ丸御門立直りニ付而今日古門置仮門立ル。(島原市教育委員会 2008, 128 頁)。

【註2】 一、今日巳ノ日吉日ニ付、三ノ丸御門建申候付\*\*為御祝御酒被下事。(島原市教育委員会 2008, 131 頁)。

### (3) 作成の時期・主体・目的

絵図押紙に「于時延宝三年霜月廿七日ノ市井安昌、初学ニノ制之」とあることからこの絵図は、〈市井安昌なる人物が、学芸を習い始めた頃の、延宝3(1675)年11月27日に作成したもの〉と考えられる。学芸を習い始めた頃であるから、自ら地理情報をまとめて絵図を作成したとは考えられない。別の絵図を写し取ったことは間違いないだろう。「安昌」は恐らく実名(名乗、諱)であり、元服後に名乗ったものと考えられる。

寛文期から貞享期にかけての「島原藩日記」には「市井(一井)武右衛門」「一井元之丞」「一井小一兵衛」などの名がみえ(島原市教育委員会 2008, 2010, 2011 巻末の人名録)、市井安昌なる人物がこのいずれか、あるいはその親類の一人であった可能性が指摘できる【註3】。

「島原藩日記」寛文13年7月2日条には、「御書院御普請奉行」一井武右衛門らに対し、慰労として帷子を一枚ずつ下賜したとの記事がある【註4】。手習いとして絵図を写したのであれば、家職として絵図方・普請方【註5】を務めた家に生まれた人物であることは容易に推察できるし、その意味でこの記事は興味深い。

「島原藩日記」延宝元(1673)年11月15日条には、「市井武右衛門が倅の平次を連れ、藩主による御目見のために登城した」との記事があるが【註6】、このとき「平次」は一定の年齢に達していたと考えられ、その父親が2年後の延宝3(1675)年に「初学」であったとは考えられない。武井武右衛門と市井安昌は別の人物であろう。倅の「平次」こそが安昌ではなかろうか。

---

【註3】 以下の例が示すように、「市井」は「一井」とも表記する。(「久留米有馬中務殿へ之御悔御礼二、一井武右衛門御使者被仰付、(略)市井武右衛門久留米より罷帰…」)(島原市教育委員会 2011, 188-190 頁)。

【註4】 一、御書院御普請奉行骨折申候付而、一井武右衛門・杉江四郎兵衛・野口市左衛門御帷子巻つ充被下候、并御歩行之衆岡本藤七・田辺加助御上一具充候、豊方万右衛門・野口市左衛門子甚九郎・六右衛門、鳥目壱貫文充被下候、并福知山より参候大工太兵衛二式百疋被下候事。

一、一井武右衛門・杉江四郎兵衛・野口市左衛門御台所二而御料理被下ル、并岡本藤七・田辺加助二も御料理被下候事。(島原市教育委員会 2008, 177 頁)

【註5】 普請方は多くの藩で武家地の管理を担当しており、それゆえ屋敷帳や屋敷割絵図を取り扱う機会が多かったと考えられる。

【註6】 一、例之通御家中御礼二登城申候事、詰分ハ例之通御居間二而御礼申上候、御表へハ御出不被遊候事。

一、正木仁右衛門倅同武助・市井武右衛門倅平次御目見二罷出候事。(島原市教育委員会 2008, 203 頁)



#### (4) 伝世の過程

これまで島原市教育委員会より刊行された「島原藩日記」に見える市井姓は、貞享5年10月22日を最後に途絶えるが、その内容は、「一井武右衛門が以前住んでいた屋敷を朝比奈兵助に与えた」というものである【註7】。藩側が明屋敷を下賜していることから、屋敷は拝領屋敷であったことが分かる。また同じ記事中に、〈別の屋敷を市井武右衛門に与えた〉とする記述が見られないことから、相対替（高橋ほか1989年、94頁など）とは考えられない。市井氏はこの記事が書かれる少し前に藩籍を離れたようである。元禄期～享保初年にかけての島原藩日記に市井姓が見えず、江戸後期の藩士明細帳（松尾1997）や幕末期の「島原藩士屋敷図」にも同姓が見えないこともまた、その徴証となろう。

その後、200年余りの時を経て近代。絵図は長崎県立長崎図書館へと寄贈される。絵図本紙裏には長崎図書館の受贈印が認められ、また「山田吉太郎寄贈」とある（図8）。寄贈前は「山田文庫」のうちの一点であったかも知れない【註8】。また寄贈の時期は、大正4（1915）年から昭和10（1935）年の間であった可能性がある（白峰2006、142頁）。

そして平成18（2006）年、「肥前島原之城図」を含む長崎図書館の古文書・絵図類は、長崎歴史文化博物館へと移管され、現在に至っている。

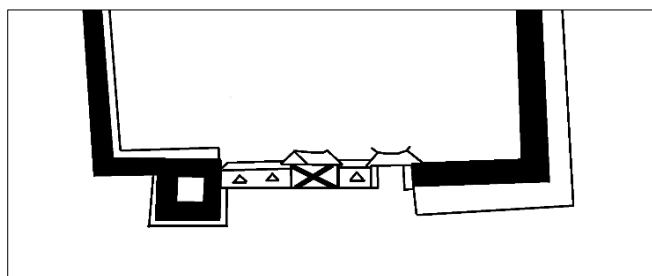


図7 「肥前島原之城図」（トレース、部分）



図8 絵図本紙裏の受贈印（トレース）

【註7】 一、一井武右衛門跡屋敷、朝比奈兵助二被仰付候、兵助跡大島与惣太夫被下番頭を以申渡候、清水市平跡屋敷、平野儀兵衛被下番頭造酒助二申渡候、何も御礼二罷出候。（島原市教育委員会2011、295頁）

【註8】 山田吉太郎が長崎図書館に寄贈した別の史料には「山田文庫」の印影が認められる。（西田2018a、8頁）

## 5. 禅林院について

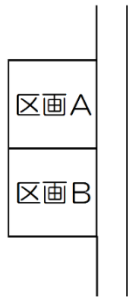
---

今回取り上げた「肥前島原之城図」には「禅林院」が図示されるが、同院は近世初期のうちに廃せられたと考えられ、絵図の景観年代を窺う上で指標となる寺院である。ところが同院は、寺号・山号や創建の経緯等、不明な点が多い。以下にその歴史・立地を概観してみたい。

まず、「肥前島原之城図」以外の絵図史料も併せて、城下北西部の寺院2区画の記載をまとめたのが表1、出典が明らかでないものも含め、史料・文献をもとに作成した年表が表2である。「禅林寺」を「禅林院」と読み替えた上で、表1・表2のうち比較的史料価値の高いもののみを見れば下記①から⑦までが読み取れる。つまり禅林院は、高力忠房の菩提を弔うために明暦2(1656)年以前に建立され、寛文9(1669)年以降のまもない時期に廃せられたと考えられるのである。

- ① 禅林院という院号は高力忠房の法名「禅林院」と関わりがある。
- ② 禅林院は高力家菩提寺の一つである。
- ③ 浄林寺は禅林院の末寺である（但し、元禄3(1690)年に寺号を与えられた浄林寺とは異なる）。
- ④ 浄林寺（上記③）という寺号は、高力正長の法名「浄林院」と関わりがある。
- ⑤ 高力忠房の一周忌の法要を、明暦2(1656)年、雲溪（桃水）を法主として禅林院で執り行った。
- ⑥ 少なくとも明暦2(1656)年～寛文9(1669)年の間は禅林院が存在した。
- ⑦ 表1の区画Aに本光寺が寺基を移すまで、同区画に禅林院が存在した。

絵図名	肥前島原之城図	本朝城絵図	肥前国嶋原城図	島原城下図	(現在)
備考	島原城下絵図 翻刻稿⑥	図9参照。	島原城下絵図 翻刻稿⑤	島原城下絵図 翻刻稿④	
区画A	「禅林院」	「禅林寺」	「寺」	「本光寺」	市営柏野住宅・ 墓地ほか
区画B	「清雲寺」	「清雲寺」	「寺」	「清雲寺」	晴雲寺
景観年代	寛文4～9年か	不明	寛文8年	延宝3年頃	



※左図は、各種島原城下絵図のうち、西北部分の寺院2区画部分を、概念図として示したもの。  
 ※上表の区画A・区画Bは、左図の区画A・区画Bと対応している。  
 ※区画Aは現在、島原市〈柿の木町〉の一部、区画Bは同市〈南柏野町〉の一部である。

表1 絵図史料4点にみる島原城下北西部の寺院2区画の記載

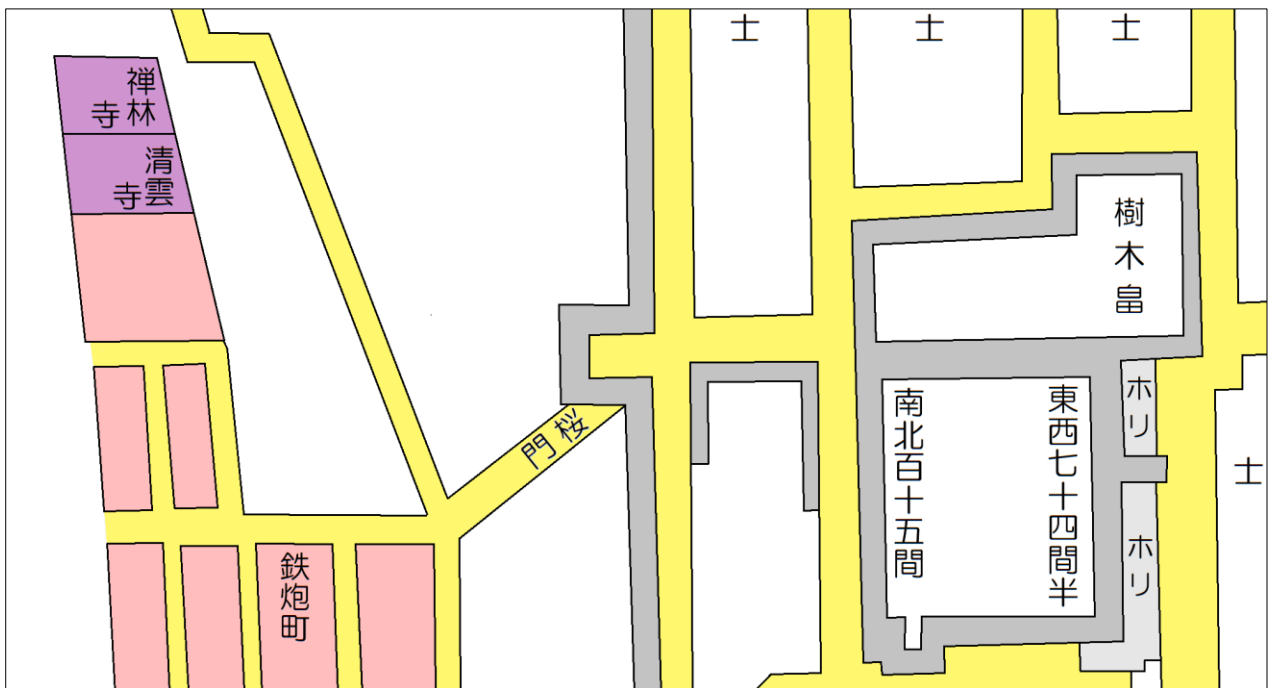


図9 本朝城絵図（部分、トレース）

年	月	日	事 績	出 典
慶長 4 (1599)	4	22	高力正長（忠房父）卒す。法名善室道喜、浄林院と号す。	林 1954b, 997 頁。
寛永 15 (1638)			高力忠房、島原への転封を命じられる。	林 1954b, 985 頁。
寛永 15 (1638)			禅林寺を創建す。	深淵 1980, 107 頁。
不詳			高力家菩提寺禅林院の末寺、浄林寺の瑞門が小庵を結び、以後、禅林院・浄林寺の僧が入庵す。	島原図書館 2019, 11-1 頁。
寛永 16 (1639)	8	18	晴雲寺開山一峰玄鉄示寂す。これより後、晴雲寺信徒、桃水を招請す。その後まもなく桃水、晴雲寺近くの禅林院に移る。	「晴雲寺由緒」【註 1】
明暦元 (1655)	12	11	高力忠房卒す。法名傑岑道英、禅林院と号す。	林 1954b, 997 頁。
不詳			桃水、藩主高力隆長公の命により、晴雲寺に隣接して建立された高力家菩提寺の禅林院に移る。	晴雲寺 HP。
明暦 2 (1656)			この年の初め頃からか、桃水、禅林院に住す。	池田 1989, 147 頁。
明暦 2 (1656)	12		桃水、高力忠房の一周忌にあたり「肥之前州高来郡禅林禅院之本尊」底板銘を記す。	禅林院本尊（鹿島市宝聚寺蔵）底板銘【註 2】。
明暦 3 (1657)			この頃桃水の禅林院に恵中・雲歩安居す。	木村ほか 1989, 268 頁。
寛文 5 (1665)			桃水、禅林院を出奔す。	木村ほか 1989, 269 頁。
寛文 8 (1668)	1	16	桃水、禅林院を出奔す。	渋江 1981, 42 頁。
寛文 8 (1668)	2	27	高力隆長、改易さる。	林 1954c, 1 頁。
寛文 9 (1669)	6	8	松平忠房、島原への転封を命じられる。	林 1954c, 1 頁。
寛文 9 (1669)	9	18	松平忠房、島原城に入城す。	林 1954c, 1 頁。
寛文 9 (1669)	9		島原柏野に本光寺の寺基を定める。	島原市役所 57 頁。
寛文 9 (1669)	11	24	禅林寺、藩主より畠地 1 町 5 反 7 畝 24 歩の寄進を受ける。	林 1954c, 159 頁。
不詳			高力家家臣、島原から他所へ向かう途中、肥前国藤津郡宝聚寺に禅林院本尊の釈迦如来坐像を預ける。	染川 1991。
延宝 3 (1675)	11	27	「肥前島原之城図」成る（写し）。現在の柿の木町（晴雲寺）に「禅林院」を図示す。	本稿所収。
天和 2 (1682)	10	5	松平忠房母卒、浄林寺（禅寺）古跡近くの円山に葬る。まもなく浄林寺古跡に小庵を置き、守冢とす。	島原市教育委員会 2019, 5-6 頁。
元禄 3 (1690)	12		円山下の小庵を浄林寺と号し、本光寺の末寺とす。	島原市教育委員会 2019, 5-6 頁。
不詳			「本朝城絵図」成る。そのうちの「肥前島原」図、現在の柿の木町（晴雲寺の隣）に「禅林寺」を図示す。	「本朝城絵図」（図 9）

表 2 禅林院関係年表

【註 1】 「檀信請於同門流長院徒雲溪桃水和尚住焉（略）無幾移席於此地禅林院」（島原図書館 2010, 11-2 頁）。

【註 2】 禅林院本尊（鹿島市宝聚寺蔵）底板銘 釈文

法主 曹洞伝灯沙門 雲溪叟 [前撰カ]州太守禅林院殿傑岑道英大居士 [大日本カ]国西海道肥之前州高来郡 禅林禅院之本尊也 明暦二丙申極月吉祥日	※「摂州太守」は、高力忠房の受領名「摂津守」の唐名。 ※「大日本」は『島原新聞』（昭和 60 年 5 月 18 日付）による。
-------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------

## 6. 参考史料・文献・WEBサイト

### ■参考史料

- 「御城下量地三分拾間之図」（内題）（九州大学蔵、松本文庫 354）。※島原市教育委員会(2016)127 頁に写真掲載。
- 「島原郡村図 島原町」（長崎歴史文化博物館蔵、3 300-3）。※近世絵図地図資料研究会(2003)通番 02815 に収録。
- 「島原城下図」（本光寺常盤歴史資料館蔵、本光寺文書 789 号）。
- 「島原城内外古図」（島原図書館松平文庫 絵図 9）。※島原市教育委員会(2016)130 頁に写真掲載。
- 「島原城廻之絵図」（熊本県立図書館蔵、チエ 352）。※島原市教育委員会(2016)126 頁に写真掲載。
- 「島原大変前後図」（島原図書館松平文庫 絵図 1）。※島原市教育委員会(2016)135 頁に写真掲載。
- 「島原藩士屋敷図」（島原図書館松平文庫）。
- 「第百二拾三号 字烏山南」（旧字図、長崎法務局島原支局蔵）。
- 「第百廿六号 字権現山」（旧字図、長崎法務局島原支局蔵）。
- 「肥前島原之城図」（長崎歴史文化博物館蔵、3 162-1）。※近世絵図地図資料研究会(2003)通番 03007-8 に収録。
- 「肥前国島原津波之絵図」（永青文庫蔵、8, 4, 丙 11-1）。※島原城天守閣にて特大パネル展示(2019 年 6 月 4 日現在)。
- 「扶桑城図記 二」（国立国会図書館蔵、請求記号ほ-67）。※デジタルアーカイブにて公開(2019 年 6 月 4 日現在)。
- 「本朝城絵図」（東京大学史料編纂所蔵、S 貴 23-1）。※所蔵資料目録データベースにて公開(2019 年 6 月 4 日現在)。
- 「森岳城図」（島原図書館松平文庫 絵図 31）。
- 「御在城割場御人数建場絵図」（本光寺常盤歴史資料館蔵、本光寺文書 3 号）。島原市教育委員会(2016)111 頁に写真掲載。
- 「禅林院本尊底板銘」（鹿島市宝聚寺蔵）。

### ■参考文献

- 吾妻町『吾妻町史』（吾妻町、1983 年）。
- 池田魯参『正法眼蔵随聞記の研究』（溪水社、1989 年）。
- 入江濱『島原の歴史』藩制編（島原市役所、1972 年）。
- 木村晟ほか『海上物語 附庵主問答』（近思文庫、1989 年）。
- 近世絵図地図資料研究会編『近世絵図地図資料集成』第 I 期 第 12 巻（科学書院、2003 年）。
- 草野正一『長崎県の小字地名総覧 一主な小字地図と小字地名—』（私家版、1999 年）。
- 国書刊行会編『続々群書類従』第十二（続群書類従完成会、1970 年）。
- 洪江鉄郎『島原城の話』（昭和堂印刷総合企画、1981 年）。
- [島原市]『平成 14 年 3 月定例会 島原市議会会議録』（[島原市]、[2002]年）。※奥付なし
- 島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第 1 集（島原市教育委員会、1981 年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻一』（島原市教育委員会、2008 年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻二』（島原市教育委員会、2010 年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻三』（島原市教育委員会、2011 年）。
- 島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第 16 集 森岳城跡石垣調査報告書（島原市教育委員会、2016 年）。
- 島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第 18 集 島原藩主深溝松平家墓所調査報告（島原市教育委員会、2019）。
- 島原市役所『島原の歴史—藩制編』（島原市役所、1972 年）。

島原図書館『平成21年度 郷土史を学ぼう会 資料集』(島原図書館、2010年)。  
島原図書館『平成27年度 郷土史を学ぼう会 資料集』(島原図書館、2016年)。  
島原図書館『平成30年度 郷土史を学ぼう会 資料集』(島原図書館、2019年)。  
白峰旬『幕府権力と城郭統制』(岩田書院、2006年)。  
高木繁幸『島原藩の歴史』第2集 一藩経済編— 島原藩の経済 (ゆるり書房、2006年)。  
高橋康夫ほか編『日本都市史入門』I 空間 (東京大学出版会、1989年)。  
鶴田倉造編『原史料で綴る天草島原の乱』(本渡市、1994年)。  
西田博「肥前浜城と島原城下町の復元的考察」(私家版、2017年a、九州大学学術情報レポジトリにて公開)。  
西田博『島原城下絵図翻刻稿①「肥前国島原之城」』(私家版、2017年b)。  
西田博『島原城下絵図翻刻稿②「筑前筑後肥前肥後探索書」』(私家版、2018年a)。  
西田博『島原城下絵図翻刻稿③「肥前国高来郡島原城図」—付 五社宮・三社宮について—』(私家版、2018年b)。  
西田博『島原城下絵図翻刻稿④「島原城下図」』(私家版、2019年a)。  
西田博『島原城下絵図翻刻稿⑤「肥前国嶋原城図」—付 寛文8年島原城請取関係史料—』(私家版、2019年b)。  
根井浄「島原の「糸けの川」『広報しまばら』平成29年1月号 (島原市市長公室、2017年)。  
林銑吉編『島原半島史』上巻 (長崎県南高来郡市教育会、1954年a)。  
林銑吉編『島原半島史』中巻 (長崎県南高来郡市教育会、1954年b)。  
林銑吉編『島原半島史』下巻 (長崎県南高来郡市教育会、1954年c)。  
深淵久『長崎女人伝』〈上〉(西日本新聞社、1980年)。  
松尾卓次『肥前島原藩明細帳』(島原図書館松平文庫、1997年)。

## ■参考金石文

染川道隆「島原藩主高力忠房公之供養塔」碑文 (宝聚寺、1991年)

## ■参考WEBサイト

島高同窓会 HP (2019年3月28日閲覧) ([http://www.shimabara-.ed.jp/kaede/modules/journal/journal\\_main.php?block\\_id=23&journal\\_id=1&page\\_no=64](http://www.shimabara-.ed.jp/kaede/modules/journal/journal_main.php?block_id=23&journal_id=1&page_no=64))

晴雲寺 HP (2019年9月21日閲覧) (<http://nagasaki-hiroba.net/seiun/>)

## 7. あとがき

---

2017年6月、『肥前浜城と島原城下町の復元的考察』という小文を発表した（九州大学学術情報レポジトリに登録）。稿を進めるなかで、島原城下絵図について若干の知見を得ることができたが、その知見をまとめたのがこの「島原城下絵図翻刻稿」シリーズである。

タイトルに「稿」とあるように、これはあくまで未完稿である。そして筆者は、島原学については甚だ初心者である。無知による錯誤・誤謬も多々あるかと思う。先学諸賢のご批判・ご叱正を得て、「稿」の一文字を削除することが出来れば、と切に願っている。

（にしだ・ひろし 〒854-0074 長崎県諫早市山川町18-4）

### 島原城下絵図翻刻稿シリーズ

- ①「肥前国島原之城」（長崎歴史文化博物館蔵）
- ②「筑前筑後肥前肥後探索書」（長崎歴史文化博物館蔵・東京大学史料編纂所蔵）  
※当論考の一部を、「筑前筑後肥前肥後探索書・讃岐伊予土佐阿波探索書について—書誌学的考察と描画法の分析から—」（『福岡地方史研究』57号、2019年）としてまとめている。
- ③「肥前国高来郡島原城図」—付 五社宮・三社宮について—（佐賀県立図書館蔵）
- ④「島原城下図」（本光寺常盤歴史資料館蔵）
- ⑤「肥前国嶋原城図」—付 寛文8年島原城請取関係史料—（東京大学史料編纂所蔵）
- ⑥「肥前島原之城図」（長崎歴史文化博物館蔵）

書名読み：しまばらじょうかえず・ほんこく・こう・ろく・ひぜん・しまばらのじょう・ず